

童話と暮らす、里山遊びコミュニティ拠点の創出

やまがたこどもアトリエ【山形県鶴岡市】



設立年月	2013年
メンバー数	5人
代表者名	結城 ななせ（ゆうき・ななせ）
連絡先 Eメール	y.kodomoatelier@gmail.com
ウェブサイト	http://nanaseyuki1986.wixsite.com/kodomoatelier
Facebookページ	https://www.facebook.com/yamagatakodomoatelier/
【団体のミッション】	私たちは、子どもたちに創造的で豊かな居場所を提供することを目的に、造形体験・自然体験・お仕事体験などの企画をしています。

団体設立経緯

子どもたちに創造的で豊かな放課後の居場所を提供することを目的に、2013年、鶴岡市内にあった使われていない施設を拠点に活動が始まりました。

「やらなければならないこと」ばかりの日々では、子どもたちの目の輝きは失われてしまいます。反対に、のびのびと好きなこと、興味や関心のある物事に取り組んでいるとき、

その目は輝き、「生きている喜び」を感じさせてくれるような、本当にいい表情を見せてくれます。

そんな時間を少しでも増やせたらと思い、心と身体を解放し、「創造」と「想像」に夢中になれる造形体験や自然体験、地域の魅力的な場所やモノ、大人と出会うきっかけとなるお仕事体験などの数々の企画を、地域の皆さまの協力のもと開催しております。

地域概要

今回のプロジェクトの開催地となるのは、山形県鶴岡市旧朝日地区。学校は統廃合が進み、子どもはほとんどいなくなってしまった地区です。自然豊かな土地に暮らす私たちですが、その生活についていえば、あまり都会と変わらず、土に触れない日常のため「自然体験」を求める声が多く聞かれます。

冬には積雪4m近くなる、豊かな自然の残る里山。フィールド提供にご協力いただいたのは、そんな旧朝日地区で有機栽培農家を営む五十嵐大輔さんです。裏には柿畠や雑木林の広がる豊かな里山に、私たちは1年を通して通いました。

活動に至った理由や背景

私たちが普段、造形体験や自然体験のプログラムに参加してくれる子どもたちや保護者の方と話していく盛り上るのは、「小屋」や「秘密基地」を作るという夢でした。自分たちのワクワクする居場所を、自分たちで作る。そんなかねてからの夢を実現するための素材が、このたびようやく整いました！

一番の課題であった建設予定地は、鶴岡市郊外ののどかな里山、旧朝日地区で有機栽培農家を営む「金三郎十八代目」五十嵐大輔さん宅の敷地内。今はなき「ニワトリ小屋」の跡地の利用を許可していただき、プロジェクトがスタートしました。

活動内容と成果

子どもたちが遊びの世界にずっと入っていくような、「物語」を大切にしています。「ドングリ小屋」という絵本をご存知でしょうか。テーマは大きな子から小さな子へ受け継がれていく秘密基地。存分に遊びまぶしいばかりに成長していく姿が描かれたこの絵本をテーマにして、ワクワクするような秘密の小屋に、大人から子どもたちへのプレゼントとして「不思議なこと」

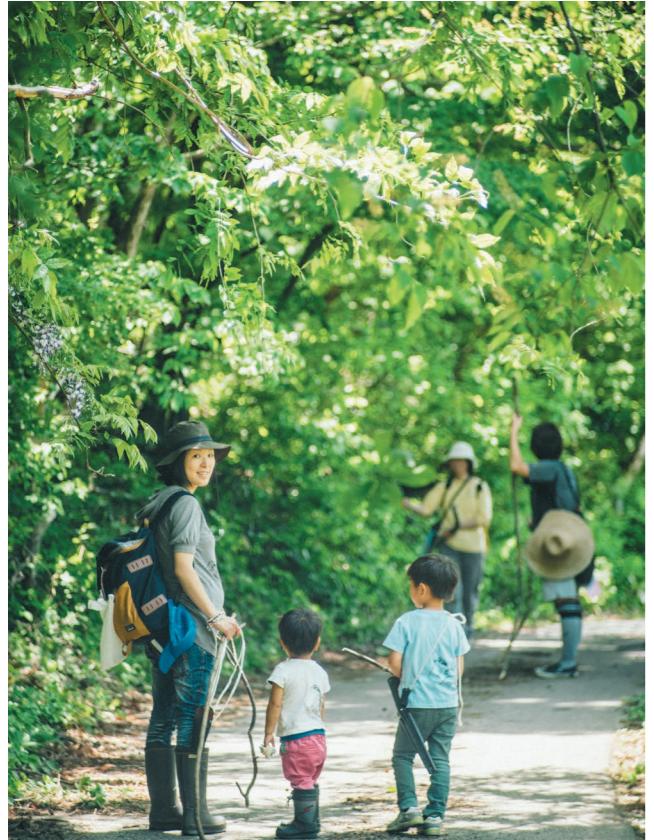
を仕掛けている——。そんなコンセプトでプロジェクトは始まりました。今回助成いただいた活動は主に「里山遊び」「小屋づくり」「不思議な仕掛け」の3つです。

1. 里山遊び

5月。初夏の日差しの中、五十嵐さん宅に集合し、1年通して通う里山に初めてお邪魔しました。何が起きるかわからない野外活動ということもあって、スタッフはアトリエメンバーの他に、山を知り尽くした所有者の五十嵐家の人々や、「森林インストラクター」と呼ばれるネイチャー遊びの専門家、保育資格を持つ方などにお声がけし、体制を整えさせていただきました。

第1回の物語テーマは「ヘンゼルとグレーテル」。帰り道に迷わないように、また次来たときはひとりでもどんどん進めるようにと、綺麗な貝殻や模様を描いた石を準備して、曲がり角や木の下に目印になるように石を置いて歩いていきました。

五十嵐さんの案内のとも、田んぼを抜け、山



を目指し、大きな堰を渡ります。子どもたちは道中見つけた草花や虫で遊びに夢中になるので、なかなか進みません。大人から見たらどんなくだらないことでも、子どもたちの目が輝き、本当にいい表情をしているときは、かけがえない時間だと感じています。何を学ぶかを明確にし過ぎた昨今の学びと違い、感じたままの事をストレートに表現できる、成功か失敗かで区別するでもなく、思う存分頭と体をフル回転する、ただただそんな体験の場を目指しました。

里山の終着地点は、五十嵐さん所有の雑木林。ここでみんなの「相棒」となる木を探して切り出します。切ってもよい木の判断基準を教えてもらい、子どもたちは欲しい木を自分で選び、帰りは誇らしげに切り出した枝を杖にして山を下りました。

五十嵐さん宅へ戻ると、お家の方が旬のお野菜を使ったスープを準備してくれています。旬のものを食べるというこだわりは、農家さんならではのもの。ご飯の後にはもうひと仕事、小屋の基礎部分に溜まったゴミや土、草を取り除くお掃除を行いました。

プロジェクトの1日は、ものづくり・里山遊び・お昼の3つをメインに構成されています。

6月。真夏のような暑さに、みんなの気持ちは1つ、「水遊びがしたい！」。この日の物語テーマは「一寸法師」。子どもが2人入れるほどの大きなプラスチックのタライを準備していました。タライの中にはなんとニワトリが1羽。野生生物の繁殖期にストレスがかかり、群で発生したいじめによって、仲間につつかれ頭の毛を抜かれてしまったため、隔離療養していたところを引き取ってきた子です。そのせいかはわかりませんが、とても人に懷いていて、子どもたちともすぐに仲良くなりました。「ニワトリの世界にもいじめがあるの？」「どうしていじめがおこるの？」、そんなお話から始めました。

さて前回、基礎の掃除をしたところには、も



う小屋の骨組みができています。建設の足場も格好の遊び場となりました。

コッコの止まり木づくりが終わると、早速里山へ。子どもたちの背丈ほどの深さの堰には、田んぼへ水を供給する雪解け水が流れています。濃くなった緑と水の煌めきが楽園のような1日でした。水の深さは大人の腰くらい。はじめは怖くて入れなくても、年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんが遊んでいるのを見て、年齢の低い子も自然と怖さが薄れていきました。しかし最後まで水に入らない子がいても構いません。小

さなタライに水をはり、カエルのプールを作ったり、遊びはそれぞれで素敵です。

7月。夏本番は、やはり堰遊びがメイン。この日、完成間近の小屋には、いずれ50羽のニワトリたちをお迎えすると子どもたちに伝え、卵を産むための「産卵箱」をみんなで作りました。絵の具で卵を描いたり、草の色に染めたり、手足を絵の具だらけにして取り組みました。

産卵箱作りが終わると、山へ出発です。もう慣れた道を、タライや虫取り網を持って出かけます。堰遊びもダイナミックになってきました。



8月。ついに50羽の幼いコッコたちがやってきました！はじめはおっかなびっくり、小屋の外から眺めていた子どもたち。小屋に入ってからは急接近で餌をあげたり、抱っこにチャレンジしたり。ニワトリと一緒に止まり木に止まる子も……。「スーパーの10個入りの卵っていくらだっけ？」そんな話から、「平飼い」と「大規模のケージ飼い」……鶏さんたちの生きる環境、食べるものなど少しじっくりお話をしました。

五十嵐さんは、有機栽培の農作物も、鶏たちの餌も、大変な気遣いで育てていらっしゃいます。里山遊びでは鶏さんたちにあげる腐葉土を集めたり、前日の嵐で増水した冷たい川の水に足を浸したり……自然の蔓と枝を使って、小さなイカダを作る子もいました。

9月。そろそろドングリの実る頃。「ドングリ小屋」の絵本のように、今度は子どもたちがニワトリたちにドングリをプレゼントします。ひととおり鶏たちと触れ合ったら、山へドングリ拾いに出発です。途中の道にもアケビや山葡萄、秋の味覚を発見できました。

いつもの川の近くで、嵐で落ちた緑のドングリを拾いつつ、枝切り鋸で高いところにも挑戦します。田んぼが終わり、堰の水かさはもう足首くらいに浅くなっていました。鶏たちには、ドングリはそのままでは食べにくいようで、石

でガンガン、碎いてあげます。そして、卵を生みはじめたニワトリたち。お昼はその卵をいただいて、目玉焼きをのせた“ラピュタパン”を作りました。

10月。秋が深まり、50羽のニワトリたちも次々と卵を産むようになりました。里山遊びは秋探し。9月にはまだ青かったドングリは綺麗な艶々の茶色に。この日もたくさん拾いました。

ドングリ小屋へ戻ると、産卵箱にたくさんの卵を産んでくれています。ひとつずつ大事にいただいて、お昼の卵かけご飯や、目玉焼きを作りました。11月～2月の間はしばらく活動はお休みです。例年ない大雪となり、里山フィールドには4m近くの積雪がありました。

冬を越えて3月。ドングリ小屋の最終回です。道路は雪が溶けても、山はまだ雪景色。大きなソリやビニールの米袋を準備して、山へは雪遊びに出かけました。寒さの中でも、子どもとニワトリたちは元気です。

最終回は、小屋の中に、3月までの活動記録の写真展を仕掛けました。これまでの活動をドングリ小屋の中で懐かしみ、そのあとは1時間近くの映像作品に仕上げていただいた活動記録ムービーを鑑賞しました。お昼は産みたて卵のホットケーキや、目玉焼き。動物とのふれあいが苦手だった子や、卵を全然食べない子が自ら

歩み寄っていく姿を見ることができるのは本当に幸せです。1年弱のわずかな期間であっても、楽しみに遊びに来てくれる子どもたちの成長は目覚ましく、感無量でした。

2. 小屋づくり

5月に基礎部分の掃除を行い、6月にはスタッフでコンクリートを打設しました。建設の部分はプロの大工さんにお願いし、金網張りや扉の塗装などできるところは自分たちで手掛けました。小屋の資材費を助成いただき、豪雪地帯でもビクともしない立派な小屋「子どもたちの里山遊びの拠点」を作ることができました。

3. 不思議な仕掛け

最終回の3月。小屋の中には、これまでの活動記録の写真がずらり。ニワトリたちが伸びやかに暮らすドングリ小屋が、写真展の会場となりました。

この仕掛けを担当してくれたのは、1年を通して写真と映像で活動を記録してくださった映像制作グループ「PlainBrain」の土田貴文さんと五十嵐丈さんです。また、映像は1時間近くの作品となり、「ドングリ小屋のプロジェクトムービー」として、ドングリ小屋の隣に設置した倉庫シアターで上映しました。

映画のように生き生きと子どもたちの姿や、里山の自然、生き物たちを捉えてください、今後の活動のPR動画としても素晴らしい仕上がりになりました。

課題と解決方法

野外活動が多く、安全管理の面からスタッフの人員確保が課題となりました。今回のプロジェクトでは助成いただいたことで安定してスタッフを配置することができましたが、これからはご参加いただく保護者の協力が不可欠となります。私たちの団体が主催する「イベント」への参加というより、里山遊びのコミュニティとして定期的にプロジェクトを続けていきたいと考えています。

今後の予定

2年目のドングリ小屋も春夏秋冬、緩やかに活動を続けて参ります。今回助成いただいた旧朝日地区のプロジェクトを契機として、山形県村山地区でも、子どもたちの里山遊びや生き物と触れ合える拠点の整備を進めたく、現在1000m²程の土地を取得予定です。

生き物の調査に始まり、土地の整備から小屋の建設まで、益々チャレンジしていきたいと思います。